

海外水ビジネスの眼

「政治経済学の原理の最初に来るのは、きれいな空気と水と大地だ」とラスキンは1875年に言った。ラスキンは、J・S・ミルの経済学を批判した美術評論家・社会思想家だ。この言葉は全イギリス労働者階級宛の『フォルス・クラヴィゲラ』にある、と『経済学の哲学』で伊藤邦武は書く。

ラスキンは、1860年の『この最後の者にも』で言う。「生産は苦勞して物を作るのではなく、有益に消費される物を作るのだ。国家の課題はいかに多くの労働を雇用するのではなく、いかに多くの生を作り出すかだ。消費が生産の目的であるように、生が消費の目的であるからだ。…ミルが『経済学原理』で『全ての当事者が自分自身の利益を考えるとして』と仮定した、利己心の経済学は、ミルトンが『失樂園』で語った天国の経済に廃墟を齎したものの再現だ」、「労働の報酬は生だ。つまり創造だ。生無くして富は無い。全ての仕事は楽しい」。

水不足とラスキンの労働観

2018年、南アフリカのケープタウンの水不足が深刻になり、水道水供給が止まる「デイ・ゼロ」に近いと叫ばれた。水道水使用規制は3年連続の早魘で貯水池水量が20%になったことが原因だ。急遽、小型海水淡水化施設を3カ所で建設することを決め、地場企業が受注した。現在の情報は無い。雨が降り海水淡水化施設の稼働で当面の飲料水危機は免れたのだろう。喉元が過ぎたので暑さ

だ。BRICSとはブラジル、ロシア、インド、中国、南アフリカを指し、2001年に作られた造語だ。ロシアのウクライナ侵攻、中国の軍事力拡大と高度技術漏洩への懸念もあってか、BRICSの経済成長に言及した報道も話題性が無くなった。経済発展とは、人口増加、都市化、経済格差増大、工業化による気候温暖化を齎す。早魘、山火事、洪水は自然災害と人的災害のミックスだと言われる時代になった。

ESG経営は話題性を持続している。マルクスが『資本論』第一巻を発刊した翌年の1868年は明治元年だ。マルクスの労働疎外説が話題性を持った20世紀は喉元を過ぎて忘れられた。マルクスの同時代人ラスキンの言葉はESG経営の先駆けだ。「労働自体が創造で生の実感だから楽しい」とのラスキンの労働快楽説は、「消費が生産の目的であり生が消費の目的だ」「政治経済学の原理はきれいな空気と水と大地だ」という言葉と共に、喉に刺さった小骨のように引っ掛かりなかなか呑み込めない。(不見丸)